

□ 書 評 □

「わが生涯の一期一会」

——大外科医ルネ・ルリッシュの自伝——

ルネ・ルリッシュ 著

森 岡 恭 彦 訳

岐阜大学教授 稲 田 潔

本書はルリッシュ症候群、動脈周囲交感神経切除術などで有名なフランスの外科医 René Leriche 教授（1879～1956）の自叙伝の翻訳書である。ちょうど日本で本年（1977年）8月に第13回国際心臓・血管学会、9月に第5回万国外科学会が開催されたが、前者には Leriche 記念講演が、後者には Leriche 賞が制定されていることから、同教授が血管外科領域で尽した功績の大きいことがわかり、この両学会と時期を一にして本書の刊行をみたのはまさに時宜を得たともいえる。

Leriche 教授は 1924 年より永年ストラスブルグ大学の教授として教育・研究活動を行い、のちには Collège de France の教授と l'Académie des Sciences の会員に推されており、医師として到達しうるすべての榮譽を得られた偉大な外科医である。

本書は教授が晩年に書かれた自叙伝であろうが、内容は単なる個人的な問題よりも、当時のフランスの医学教育、試験制度、医学研究について、さらにその改正、発展につとめた回顧と反省などに主眼がおかれている。また第一次大戦前のフランスを中心とする国内および国際情勢、とくに教授自身が軍医としてつとめた軍陣外科の模様、さらにこの間の膨大な外傷外科の経験より理論的外科へと発展させてゆく過程など、医学史的にも興味ある多数の事実が詳しく述べられている。

本書の5/10以上を占めるのは教授の頻回にわたる外国旅行談で、各国の著名な外科医の風貌が興味深く書かれており、親近感を抱かせるのみでなく、同教授の国際的な活躍が広汎でスケールの大きいことがよくわかる。

Leriche 教授はすでに 1951 年に

la Philosophie de la Chirurgie（1958 年 木村高偉博士により外科学序説として訳されている）を出版されており、外科学が単なる手術手技の追求にあるのではなく、その発展に病理学、生理学などの基礎知識の必要なことを指摘し、また形態学のみならず機能的問題、すなわち今日のいわゆる病態生理学的概念を確立した点で大きな功績があるが、教授が深い思索、すばらしい独創性および鋭い洞察力の持主であることが随所でうかがわれる。

本書刊行にあたり訳者の恩師である石川浩一 東大名誉教授、Leriche 教授の高弟で血管外科で有名な Fontaine 教授、また訳者が留学中指導を受けたパリ大学 Olivier 教授の序文があり、本書の意義を明らかにしている。訳文は流暢で読みやすく、適切な多数の脚注により日本人にはなじみのうすい当時の欧州の医学および社会情勢も理解しやすい。

若い外科医に、外科学のあり方のみならず、人生について思考、反省させ、また啓発させる点が少なくない。外科医はもちろん、一般医家、医学生にも一読の価値ある書として広く推せんする。

A 5 頁 272 図 9 1977 ￥2,000 円 160
医学書院刊
（森岡氏は自治医大教授）